



生きた心地もしないほどやせても  
子どもたちのことを一生懸命考えてくれた  
母のことを想うと、  
本当につらい気持ちになります。

小学校3年生の時に終戦をむかえた和田さん。  
父親は戦死。女手ひとつで育ててくれた母親の苦労が  
今でも忘れられません。

和田 淳子さん (当時9才)

### 家族がはなればなれになった疎開生活

わたしは太平洋戦争当時、片江小学校(当時は片江国民学校)に通っていました。小学校2年生の時に、片江小学校の低学年の児童は3月の大空襲の前に奈良県の長谷寺へ疎開しました。ボタンの花で有名な近鉄電車の駅がある長谷寺です。疎開先では、先生と食事を作ってくれる係のお母さん方と日々を送りました。

わたしの家族は、母と兄と弟、わたしの4人です。戦争中、母と兄とわたしは疎開先でいっしょにすることができました。わたしの母が、疎開先の食事係としていっしょに疎開先に来ていたからです。母と一緒にいることができてわたしは幸せでした。他の児童はみんな、家族とはなれて疎開先に来ており、夜にはさびしさのあまり「お母さん、お母さん」と、泣いていました。母が疎開先にいたおかげで、わたしは幸せだったと思います。



「学童集団疎開の出発(片江小学校)」

### ひとりぼっちの弟

わたしたちが疎開していたころ、弟はまだ4才でした。幼い弟は母の実家の奈良県田原本に預けられており、1週間に1度、母とわたしで会いに行きました。

わたしたちが会いに行くと弟は母からはなれず、別れ際に大声で泣いていました。「母ちゃん!ぼくもいっしょに連れて帰って!」と泣く声は村中にひびきわたっていました。母は歩きながら、ずっと声をあげて泣いていました。その時の弟の声は、今も耳からはなれません。

### 焼けてしまった片江小学校

終戦後、集団疎開から東成区へ帰ってきて、学校へ行くことになりました。しかし、片江小学校は空襲で丸焼けになっていたため、校舎がありませんでした。

そこで、片江小学校の児童は今里小学校の一部と、神路小学校の分校を借りて勉強をしました。わたしは神路小学校の分校で勉強をしました。現在の「大今里公園」があるところに、当時は神路小学校の分校がありました。校舎の周辺は草が生いざかり、大変な荒地でした。道はどろ水であふれ、学校以外の建物が全くありませんでした。今は立派な公園になっていますが、みなさんは戦後ここに分校があったことを知っていますか。片江小学校が建てかえられるまでの間、そこで勉強をしていました。

### 「鶴の脚」と言われた母

わたしの家は片江小学校の近くにありましたが、3月の大空襲の時に小学校と共に焼けてしまいました。田



「現在の大今里公園」  
神路小学校の分校があった。片江小学校の児童が通っていた。

原本にある母の実家も、焼夷弾が落とされ丸焼けになり、母は実家も大阪の家も失いました。

疎開先から東成区へ帰って、住む所がなくなっていたため、わたしたち家族は知人の家の2階を借りて生活をしていました。

終戦後はお金も、食べものも、衣服もなくとても苦しい生活でした。母は3人の子どもを食べさせるため、自分の食べものもわたしたちに分けあたえ、やせ細ってました。周りの人からは「あんたのこのお母さん、鶴の脚やねえ。」と言われていました。鶴の脚とは、身の無い、骨と皮だけの脚ということです。

食べるものが一切なく、おはしもありませんでした。でも、おはしは必要ありませんでした。なぜなら、おはしが必要な食事ができなかったからです。おかゆはすーっと飲めるような薄いものです。「目玉の映るおかゆさん」と言って、おわんをのぞいたら自分の目玉が映るほど薄いおかゆという意味です。そのようなものを食べて生活をしていました。

当時、お金をかせぐ手段として「買い出し」というものがありました。田舎の農家へお米や野菜を買いに行き、それを大阪へ持って帰ってきて売ります。そしてお金にかえていました。わたしの家は焼けてしまって何も残っていませんから、当然お金もありません。母が近所の人から何とかお金を借りて買い出しをして、わたしたちの生活を支えていました。

それでも、白いごはんを食べることはできません



「当時の衣料切符・米穀通帳の資料」 提供:ピースおおさか  
配給の制度はあったが、物資の不足は深刻であった。